

粗製剥片石器研究ノート（Ⅰ）

原田 幹

1. はじめに

縄文あるいは弥生遺跡の調査で出土する石器のなかに、砂岩などの河原石を打ち割った剥片を未加工あるいは簡単な調整加工を施しただけの粗雑な石器を目にすることがある。当地域においてもこの主の石器は比較的古くからその存在が知られていたにも関わらず、名称も定まらないまま石器としての位置付けも不確定なものであった。近年朝日遺跡の調査報告書で詳細な報告や使用痕の分析がなされるなど（文献7・25）、この石器をめぐる問題意識もしだいに高まっているように思われる。筆者自身もたまたま、平成5年度に調査を担当した渥美町川地遺跡、今年度調査に参加した清洲町朝日遺跡でこの種の石器に接することになり関心を寄せていた。

この石器は以前よりイネの収穫具としての用途が注目されていたが、具体的な機能・用途の問題については未検討の部分が多く、時期的な位置付けもよく整理されていないのが現状である。もとよりこれらの問題について明確な解答を用意しているわけではないが、今後の分析、研究に対する一定の方向性を得るために、現状の整理を目的とした覚え書きとして本稿を作成することにした。

石器の名称であるが、この主の石器が報告された文献を参照すると、スクレーパー、刃器、横刃形石器、不定形刃器等様々な名称が用いられている。本稿で用いる「粗製剥片石器」の名称は『朝日遺跡Ⅳ』の報告書で使用されたものである。この名称については「製作技術上等の意味合いにおける分類としては包括的な内容を持ちすぎ……何らかの目的に使用された利器としての石器の名称としては不適切」という批判もある（文献17）。

確かに漠然とした名称ではあるが、機能・用途が特定されていないという現状、他に適当な名称が用意されていないことから便宜的にこの語を使用することにした。他の地域との整合性をとるならば「横刃形石器」の名称が比較的普及していると思われるが、他地域との関係や横刃形石器の定義など未検討であることから今回は保留し、「粗製剥片石器」として包括的にまとめることにした。

2. 粗製剥片石器の分類

素材剥片による分類

粗製剥片石器の製作技法は、扁平な円礫の側面に打撃を与え、得られた剥片をそのまま用いるか、簡単な加工を加えるだけの単純なものである。剥離面には、バブルが発達したものもみられ、通常、打撃点と反対側に生じる鋭い縁辺を刃部とする。加えられる調整加工が少ないため、石器の形状は、素材となる剥片の形状に規定される部分が大きい。

この剥片石器の製作技法については、打製石斧の素材剥片の製作工程と密接に関係するようである。打製石斧の素材剥片あるいは製作時に生じた剥片と報告されているものには、粗製剥片石器と類似したものが多く認められる（文献13・18等）。小林公明氏は、円礫からの剥片採取技法を「扁平円礫打割技法」と呼称、説明している（文献15）。さらに剥片の分類については、長野県飯田市の恒川遺跡の報告書において詳細な説明がなされている（文献16）。ここでは恒川遺跡報告書を参考にしつつ、剥片の自然面と剥離面の関係から大きく3種類に分類しておく。（第1図）

I 類 一方の面が自然面からなる。扁平な円礫から採取される一次剥片を素材とするもの。

平面形は、円形・縦長楕円形・横長楕円形・貝殻状と多様なものがみられる。

II 類 両面とも剥離面からなるが、一方の面に部分的に自然面を残す。円礫から採取される二次以降の剥片で、一次剥片採取位置に対する二次剥片の打撃点の位置により形状が左右される。

III 類 両面とも剥離面からなる。連続して剥片を採取したもので、全く自然面を残さないかあるいは背部ないし側面に部分的に自然面を残す。剥片の形状は、以前の剥離面の形状、打点の位置などによる影響を受け不定型なものが多い。

調整加工による分類

調整加工が施される部位は背部、側面、刃部である。剥離及び敲打による背部、側面への加工は剥片石器の形態的な部分を規定し、刃部への調整は機能部の形状に関わってくる。刃部に施される調整には連続した調整剥離があるが、後述する使用痕と区別が難しいものもあるため、ここでは背部、側面への加工の有無により、形態的な分類を行う。(第2図)

A 類 調整加工を全く行わず、素材剥片をそのまま使用するもの。

B 類 背部に敲打、剥離等による調整を施すもの。

C 類 側面に何らかの調整を施すもので、削ぎ落とししたり、敲打、剥離などの調整を加える。その形状によりさらに細分される。

1. 両側面上部に大きな抉りを入れるもの。典型的なものは、「有肩扇形状石器」に類似する。

2. 両側面上部に敲打、剥離による調整を施すが、大きく抉れないもの。

3. 両側面を直線的に大きく削ぎ落とす形態の

もの。平面形は台形状を呈する。(背部がなく三角形を呈するものも含む)

4. 3と同様だが、平面形が長方形に近い形態を呈する。

5. 両側面にわずかな調整痕を残すもの。小さな抉り状のものが典型だが、使用痕による剥離と判別が難しいものもある。

D 類 背部及び側面に調整を施すもので、B類、C類の複合。細分はC類に同じ。

以上の素材剥片の分類及び調整加工が、粗製剥片石器の形態を規定する大きな要素と考えられる。以下、粗製剥片石器の形態上の分類は、I-A類、III-C2類というように表記する。

この他にも、刃部平面形、刃部断面形と刃角、法量などの属性を想定することができるが、今回は補足的な説明にとどめる。

刃部平面形 外彎・直線・内彎

内彎するものの多くは、使用による刃部の後退の可能性がある。また、使用の結果磨耗して刃部の一部が直線状に変形したものもある。刃部平面形が製作時の形態を反映したものか、使用の結果であるかは判断を必要とする。

刃部断面形 剥片剥離時の偶発的な要素に左右される部分が大きく、分類するのは難しい。刃角は鋭いもので 10° 前後、鈍いものでは 60° ぐらいまでと幅がある。計測する部位(何処を刃部と特定するか)によっても値に幅がでる。

法量 形態と並んで重要な項目であるが、実際の石器は個体ごとの幅が大きく、グラフ上で明確なまとまりを示さない場合が多い。小型のもので幅 5cm ・重さ 40g 、大きなものでは幅 10cm 以上、重さ 700g 以上のものまである。法量については、各部位の計測方法等を含め改めて検討する機会をもちたい。

形態の時期差

上記の分類をもとに粗製剥片石器の時期的な変化を概観しておきたい。ただ、現時点では細かな時期を特定できる資料も少なく、詳細な時期ごとの形態の変化を明らかにするのは困難である。あるいは細かな時期単位での形態の変化はほとんどないのかもしれない。本稿では、縄文時代の川地遺跡、弥生時代の朝日遺跡を代表例としてとりあげ、縄文と弥生時代での相似点を中心に概観していく。

当地域での粗製剥片石器の初現は明らかではない。特に縄文時代の資料は報告例が少なく、不明な部分が多い。他地域での例を参考にすれば、富山県馬場山遺跡群（縄文中期）、新潟県岩野E遺跡（縄文早期～前期）、神奈川県一色遺跡（縄文早期）、長野県恒川遺跡（縄文中期～）と広範な地域で同様な石器が認められ、時期も縄文早期までさかのぼる可能性さえある。愛知県内で縄文時代の粗製剥片石器を最も多く出土しているのは渥美町川地遺跡である。石器個別の時期は不明だが、出土した土器は縄文後期を主体とし、粗製剥片石器は200点以上の資料が得られている。県内ではこの遺跡より古い縄文中期以前を主体とする遺跡での出土例は知られていないが、今後の報告に注意していきたい。

さて、川地遺跡の資料であるが、報告されている資料は全て一次剥片を素材とするI類で、未加工のA類が大半を占める。わずかに背部を調整するB類（4・6）があるが、背部の調整であるのか剥離により背部を刃部に作りかえているのか問題がある。また、側面をわずかに剥離するC5類の可能性もあるもの（3・7・9・11）もあるが、調整であるか使用痕であるかいまひとつはっきりとしない。他にも渥美町伊川津遺跡、豊田市三斗目遺跡、同三本松遺跡等の資料があるが、いずれも未加工のA類が主体であり、縄文後晩期では剥片

をほとんど加工することなく使用していたものと考えられる。

縄文の資料では調整加工が明確ではないのに対し、弥生時代の資料には各種の調整加工を施すものがみられる。弥生時代の代表的な資料として清洲町を中心に展開する朝日遺跡があげられ、時期も弥生時代前期から後期まで各時期のものがある。

朝日遺跡の資料では、I類、III類、II類の順に各種の剥片石器が認められ、調整加工では、A・B・C・Dの各類がある。特徴的なのは両側面に加工を加えるC類、あるいは側面及び背部に加工を加えるD類の存在である。この傾向は朝日遺跡のみでの現象ではなく、甚目寺町阿弥陀寺遺跡をはじめ濃尾平野周辺の弥生遺跡の多くで認められる。なお、三河地域では弥生時代の粗製剥片石器の報告例は今のところなく、この種の加工を施すものが三河地域を含めて存在するかは今後の資料を待たなければならない。

これまでの報告では弥生前期の資料に恵まれていないが、一宮市山中遺跡出土資料にI-C1類があり（第7図29）、弥生前期には両側面に明確な調整加工を施すものが出現しているものと考えられる。

最後に粗製剥片石器の終末の問題である。一部には弥生後期の可能性を有する資料もあるようだが（石黒立人氏の御教示による）、筆者はまだ確認していない。今のところ弥生中期末を最後に急速に衰退するものと理解している。

3. 使用痕

石器の機能・用途を推定する方法として、石器に残された使用痕を分析する方法がある。粗製剥片石器の場合形態上の特徴が乏しく、刃器という以外には積極的に機能・用途を類推することは難

しい。しかし、刃部を観察するといくつかの特徴的な痕跡を見いだすことができ、この痕跡が生じるメカニズムを明らかにすることで具体的な機能・用途に迫ることができるものと考えている。ここでは、肉眼で観察される粗製剥片石器の刃部の状態について代表的なものを記載する。

刃部の状態（第3図）

- a. 剥離。数mm～1cm台の剥離が連続するもの、片面のみあるいは両面に認められる。
- b. 数mm程度の小剥離。連続的なものと非連続的（ランダム）なものがある。
- c. 磨耗。刃端にわずかな面をもつ。発達部の刃部平面は直線的になるものが多い。
- d. 磨耗、あるいは磨面。わずかな光沢を有する。
- e. 欠損（折れ）。刃部断面が薄いものにみられる。
- f. 刃潰れ、あるいは敲打痕。周辺に剥離を伴う。
- g. 刃部周辺に光沢痕。いわゆるコーングロス。

a bについては使用痕だけでなく、調整剥離も含まれる可能性がある。判断が難しいのはbの小剥離である。非連続的なものについては使用痕、すなわち刃こばれ等の痕跡と推定されるが、連続的に小剥離が認められるものについては調整加工の可能性も考えられる。c以下は何らかの使用痕と思われる。c、dは刃部の磨耗で、dは磨製石器の表面のような滑らかな外観でわずかに光沢を有するのを特徴とする。いずれも対象物と刃部との継続的な接触によって生じるものであろう。fも磨耗の一種とみられるが、典型的なものは刃端が白く変色し丸味をおびた面になり、刃部の本来の鋭さは失われている。むしろ敲石の敲打部に類似しており、刃部に直交した線上の痕跡をとどめるものもみられる。刃縁に剥離を伴うなど、強い衝撃を受ける作業が予想される。gはいわゆる

コーングロスで、ロー状光沢ともいわれるようにローを塗ったような独特の強い光沢である。

上記の刃部使用痕は個別に観察されるかあるいは複数の痕跡が複合して観察される。後者については、同一の作業において複数の使用痕が同時に生じる場合と、別用途への転用により当初とは異なる使用痕が形成される場合がある（gの後にfの使用痕が発達する例など）。

使用痕の分析には肉眼レベルでの観察だけでなく金属顕微鏡等を用いた微細な痕跡を分析する方法があり、多くの成果をあげている。今回取り上げた資料のなかにも、金属顕微鏡による観察を実施したのがあり、いくつかの資料で使用痕を確認している。現段階では体系的な分析を行っておらず検討できないが、使用実験によるデータの蓄積と使用痕の類型化を図ることで、機能・用途推定の大きな手がかりになるものと期待される。

4. 粗製剥片石器をめぐる問題

形態上の差異では、縄文と弥生では大きな違いが認められる。縄文の資料は剥片に対して調整加工を施すものは少数で、ほとんどがI類の剥片を未加工のまま用いるA類が主体である。これに対して朝日遺跡を代表とする弥生時代の資料では、側面を中心にはっきりとした加工を施すC類、D類が加わり、形態的なバリエーションが豊富になる。これは製作時に特定の形態を意図した作り分けが行われていたということであり、機能・用途の違い、使用法の違いが形態の違いとして表出していると理解したいところである。この意味において形態的に未分化な縄文と各種の形態に分化する弥生という対比ができ、同一の製作技術による石器であっても、機能・用途、使用法など縄文と弥生では質的に異なる部分を多分に含んでいた可能性がある。

弥生時代の粗製剥片石器に特徴的な使用痕に g としての刃部周辺に認められる光沢痕がある。コーングロスと呼ばれるこの光沢痕はイネ科植物の切断によって生じることが明らかにされており、粗製剥片石器の機能・用途のひとつがイネの収穫具であったことはほぼ間違いないであろう。朝日遺跡で g が確認されているのは24点と全体の資料のなかでは少数であるが、肉眼で観察されるほど発達するにはかなり長期の使用が前提となるであろうから、顕微鏡を用いた使用痕分析の結果によってはさらに数は増えるものと予想される。朝日遺跡の資料で g が確認されている資料の形態をみると、1 類を主とする C・D 類の占める比率が高く、若干 A 類が伴う組成になっており、側面調整との結びつきが強い。弥生時代における粗製剥片石器の質的変換の背景に収穫具としての側面が強く関わっていることが考えられる。

粗製剥片石器について収穫具という側面に着目し言及した論考は多くみられる。春成秀爾氏は縄文晩期伊川津遺跡の報告書で粗製剥片石器（報文ではスクレーパー b 類）を穂摘具と評価し、打製土掘具とセットをなす縄文晩期の農耕を想定している（文献22）。春成氏がコーングロスとした資料（第7図27）を筆者は確認していないが、今のところ明確な g コーングロスは縄文時代の資料では確認していない。縄文の農耕そのものを否定するわけではないが、粗製剥片石器の用途を収穫具のみに直結させるのは危険であろう。弥生時代前期には明確に g を確認できる資料が存在するが、これと関連して問題となるのは磨製石庖丁との関係である。加藤安信氏は当地域の磨製石庖丁の稀少さとあわせ、磨製石庖丁を儀礼的、象徴的な道具、粗製剥片石器を日常的な収穫具と捉えようとしている（文献14）。粗製剥片石器の社会的な側面に関わる問題として注目される見解であろう。

粗製剥片石器の機能・用途について収穫具としての側面は大きな問題であるが、他の用途を推定すべき資料も多く、問題を収穫具のみに集約することはこの石器に対する理解を一面的なものにしてしまうおそれがある。縄文、弥生の両資料に認められる c、d の磨耗、あるいは朝日遺跡をはじめ弥生遺跡に類例が多い f の刃潰れ（敲打）など、g 以外の使用痕はほとんど機能・用途の特定が十分に行われていない。粗製剥片石器という包括的な区分のなかには、多様な機能・用途が含まれていると考えられ、まだよく解明されていない縄文の資料も含め、具体的な機能・用途を追究していく必要があるものと思われる。

参考文献

1. 愛知県教育委員会 1982 『朝日遺跡Ⅱ（本文篇2・図版篇）』
2. (財)愛知県埋蔵文化財センター 1990 『阿弥陀寺遺跡』
3. (財)愛知県埋蔵文化財センター 1991 『麻生田大橋遺跡』
4. (財)愛知県埋蔵文化財センター 1992 『勝川遺跡Ⅳ』
5. (財)愛知県埋蔵文化財センター 1992 『山中遺跡』
6. (財)愛知県埋蔵文化財センター 1993 『三斗目・三本松遺跡』
7. (財)愛知県埋蔵文化財センター 1993 『朝日遺跡Ⅳ』
8. (財)愛知県埋蔵文化財センター 1994 『貴生町遺跡Ⅱ・Ⅲ 月繩手遺跡Ⅱ』
9. (財)愛知県埋蔵文化財センター 1995 『川地遺跡』
10. 渥美町教育委員会 1988 『伊川津遺跡』
11. 石黒立人 1992 「伊勢湾地方に於ける弥生時代石器組成の変遷」『弥生時代の石器—その始まりと終わり—第6分冊』埋蔵文化財研究会
12. 一宮市史編纂室 1967 『新編一宮市史 資料編 二』
13. 岡本恭一 1991 「石製品」『栗田遺跡発掘調査報告書』(社)石川県埋蔵文化財保存協会
14. 加藤安信 1994 「伊勢湾周辺地域の磨製石庖丁、若しくはその象徴性」『年報 平成5年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
15. 小林公明 1978 「第6章考察 第2節石製農耕具」『曾利 第三・四・五次発掘調査報告書』富士見町教育委員会
16. 桜井弘人 1986 「石器」『恒川遺跡群』飯田市教育委員会

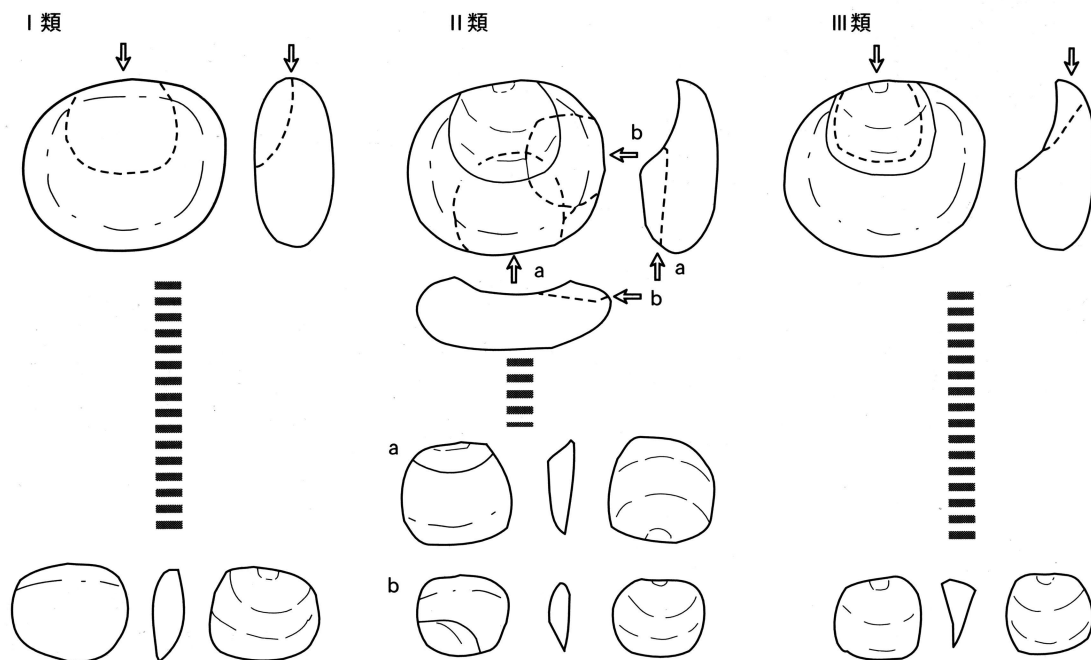
17. 佐野康雄 1993 「弥生時代における石器群の様相についての一考察」『尾崎遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
18. 砂田佳弘 1982 「打製石斧について」『東京都国分寺市恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅲ』国分寺市教育委員会・恋ヶ窪遺跡調査会
19. 富山県教育委員会 1987 『北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編3—』
20. 名古屋市教育局 1996 『西志賀遺跡—発掘調査の概要—』
21. 新潟県教育委員会 1986 『北陸自動車道 糸魚川地区 発掘調査報告書Ⅰ』
22. 春成秀爾 1988 「伊川津遺跡出土石器の特色」『伊川津遺跡』渥美町教育委員会
23. 原田幹 1995 「川地遺跡出土の石器について」『川地遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
24. 尾西市教育委員会 1990 『愛知県尾西市大平遺跡発掘調査報告書』
25. 町田勝則 1993 「粗製剥片石器の使用痕について」『朝日遺跡Ⅳ』(財)愛知県埋蔵文化財センター
26. 御堂島正 1989 「有肩扇状石器の使用痕分析」『古代文化』41-3 (財)古代学協会
27. 御堂島正 1989 「『挟入打製石庖丁』の使用痕分析」『古代文化』41-6 (財)古代学協会
28. 御堂島正 1990 「横刃型石庖丁の使用痕分析」『古代文化』42-1 (財)古代学協会

第1表 第4～6図掲載資料観察表

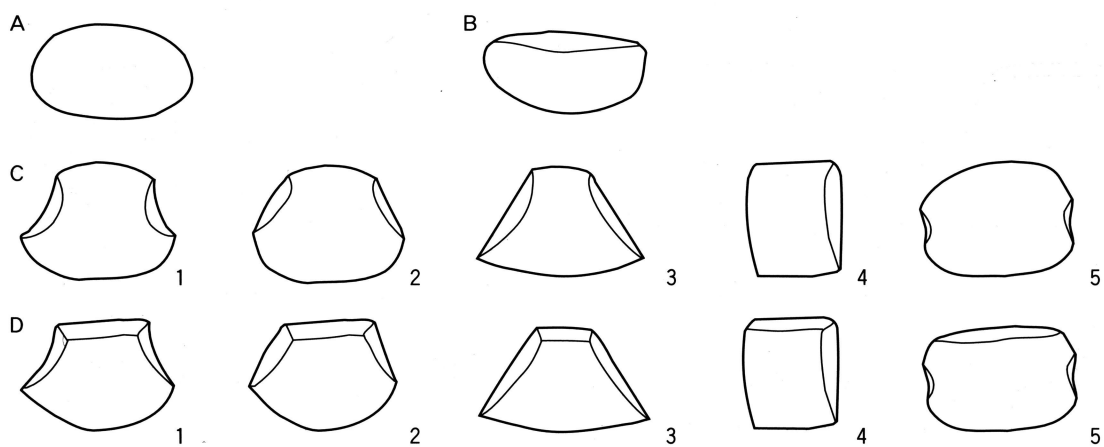
番号	報告書図番号	分類	刃部	法量(長×幅×厚・重)	石材	出土遺構	時期	備考
1	第28図60	I-A	b	8.2×10.0×2.1・204	砂岩		縄文後期	
2	第29図86	I-A	a	5.5×7.1×1.5・72	砂岩		縄文後期	
3	第29図79	I-C4?	b	6.7×12.6×2.1・224	砂岩	S D02	縄文後期	
4	第29図85	I-B	b	5.4×5.9×1.4・46	砂岩		縄文後期	
5	第28図62	I-A	b・e	7.5×9.1×1.2・104	砂岩		縄文後期	
6	第29図84	I-B	e	5.8×9.4×1.3・82	砂岩		縄文後期	
7	第29図87	I-C5?	b・c	6.5×(8.7)×1.5・(106)	砂岩		縄文後期	
8	第29図88	I-A	d	6.4×(5.6)×1.5・(62)	砂岩		縄文後期	
9	第29図89	I-C5?	d	4.5×7.6×1.2・50	砂岩	S D01	縄文後期	
10	第29図82	I-A	a	5.8×10.2×1.4・126	砂岩	S D01	縄文後期	
11	第28図72	I-C5?	a・e	10.3×15.3×2.0・432	砂岩	S D01	縄文後期	
12	図版Ⅰ・10-1	I-A	a・g	12.4×9.4×2.8・350	砂岩	S D X Ⅲ	弥生中期前葉～中葉	a 後 g 発達
13	図版Ⅰ・15-12	I-A	d	9.9×6.9×1.4・100	ホルンフェルス		弥生	
14	図版Ⅰ・15-4	I-C2	d	9.0×6.8×2.5・156	濃飛流紋岩		弥生	
15	図版Ⅰ・14-3	I-C5	e	7.5×7.0×2.6・144	花崗岩		弥生	
16	図版Ⅰ・10-5	I-D2	f	6.6×10.8×1.9・127	砂岩		弥生	
17	図版Ⅰ・12-4	I-D2	f	10.1×14.9×4.0・692	砂岩	S D X IV	弥生中期末～後期	
18	図版Ⅰ・9-3	I-D2	g	8.4×11.0×1.9・187	砂岩		弥生	
19	図版Ⅰ・8-2	I-C1	b・g	6.7×8.3×2.0・121	砂岩		弥生	
20	図版Ⅰ・8-4	I-C1	b・g	8.1×7.3×1.1・84	泥岩	S B22	弥生中期末	
21	図版Ⅰ・9-2	I-D2	g・f	6.8×10.6×1.5・109	砂岩		弥生	g 後 f 発達
22	図版Ⅰ・10-7	Ⅱ-C3	b・g	12.4×9.4×2.8・350	砂岩		弥生	b 後 g 発達
23	図版Ⅰ・10-6	Ⅱ-C3	g・e	6.6×8.1×1.2・47	砂岩		弥生	
24	図版Ⅰ・11-1	Ⅲ-A	c・e	7.6×9.2×2.2・152	砂岩	S D X I	弥生中期末	
25	図版Ⅰ・17-8	Ⅲ-D1	a or f	7.2×11.2×0.9・85	頁岩	S D15	弥生	
26	図版Ⅰ・16-6	Ⅲ-A	f	9.8×7.9×4.6・396	砂岩		弥生	

第2表 県内粗製剥片石器出土遺跡一覧表

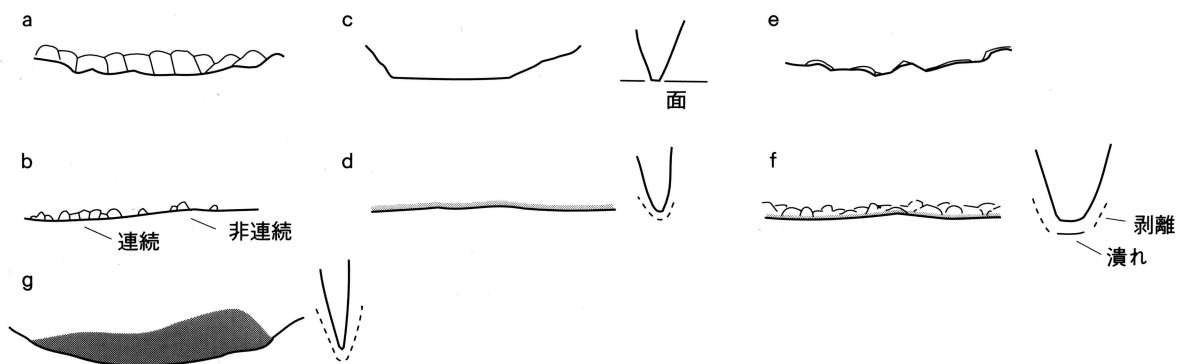
遺跡名	所在地	分類	時期	石材	名称	文献
川地遺跡	渥美町	I-A・I-B	縄文後期	砂岩	粗製剥片石器	文献9
麻生田大橋遺跡	豊川市	I-A他	縄文晩期		剥片石器	文献3
伊川津遺跡	渥美町	I-A	縄文晩期	砂岩・流紋岩	スクレーパー	文献10
三本松遺跡	豊田市	I-A	縄文晩期前半	安山岩	搔器・削器	文献6
元屋敷遺跡	一宮市	I-A他	弥生前期	砂岩等	剥片石器	文献12
山中遺跡	一宮市	I-A・I-D3	弥生前期	細粒砂岩・ホルンフェルス	横刃形石器	文献5
月縄手遺跡	名古屋市区	I-A	弥生前期	石英斑岩	粗製剥片石器	文献8
朝日遺跡	清洲町	各種有り	弥生前期～中期末	砂岩・安山岩等	粗製剥片石器	文献7
朝日遺跡	清洲町	I-A・I-C1	弥生中期	砂岩・ホルンフェルス	不定形刃器	文献1
勝川遺跡	春日井市	I-A・Ⅲ	弥生中期～後期		横刃形石器	文献4
阿弥陀寺遺跡	甚目寺町	各種有り	弥生中期中葉～末		刃器	文献2
西土賀遺跡	名古屋市	I-C1	弥生中期中葉～末		粗製剥片石器	文献20
大平遺跡	尾西市	I-C1	弥生中期	安山岩	剥片石器	文献24



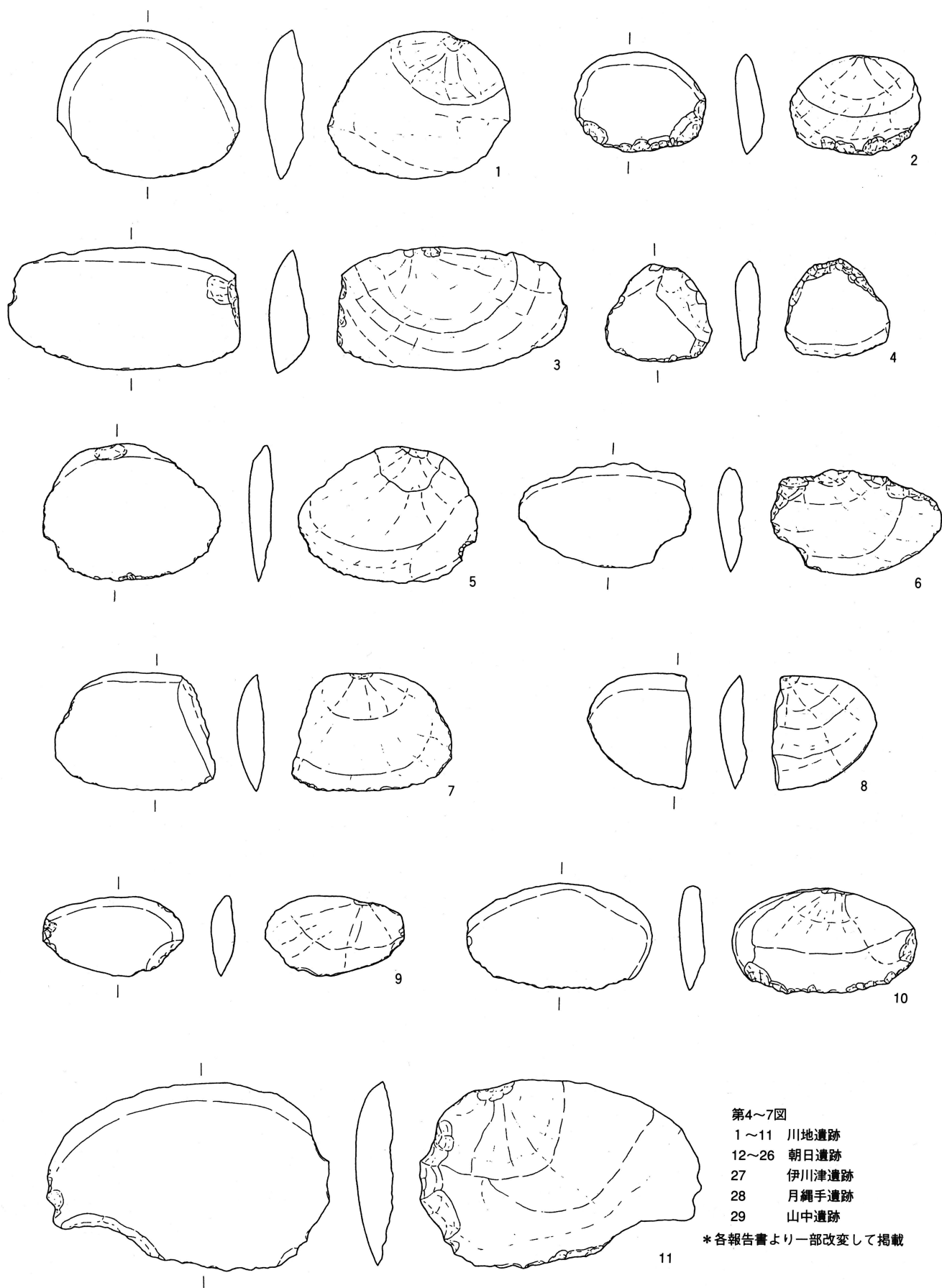
第1図 素材剥片の分類



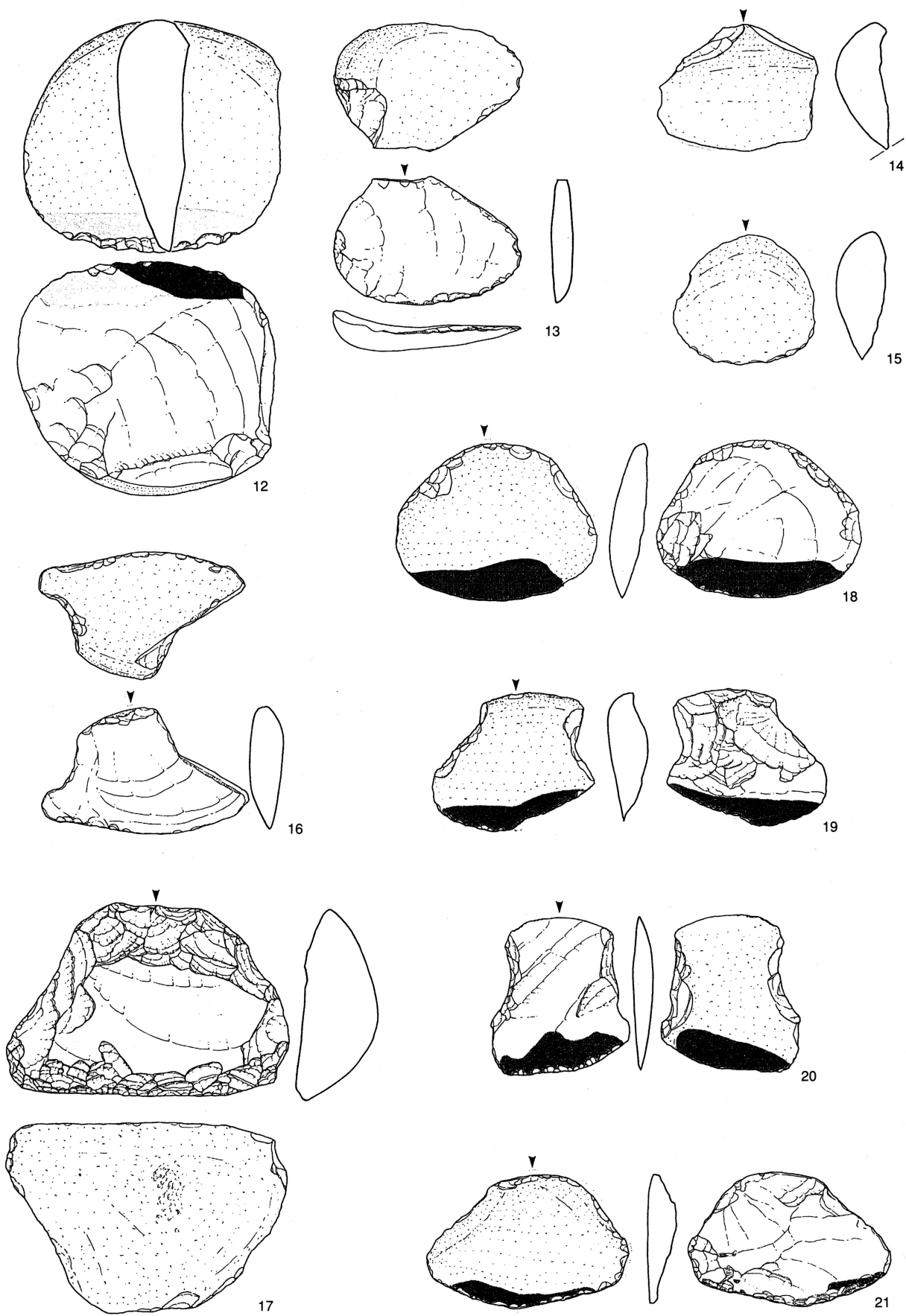
第2図 調整加工による分類模式図



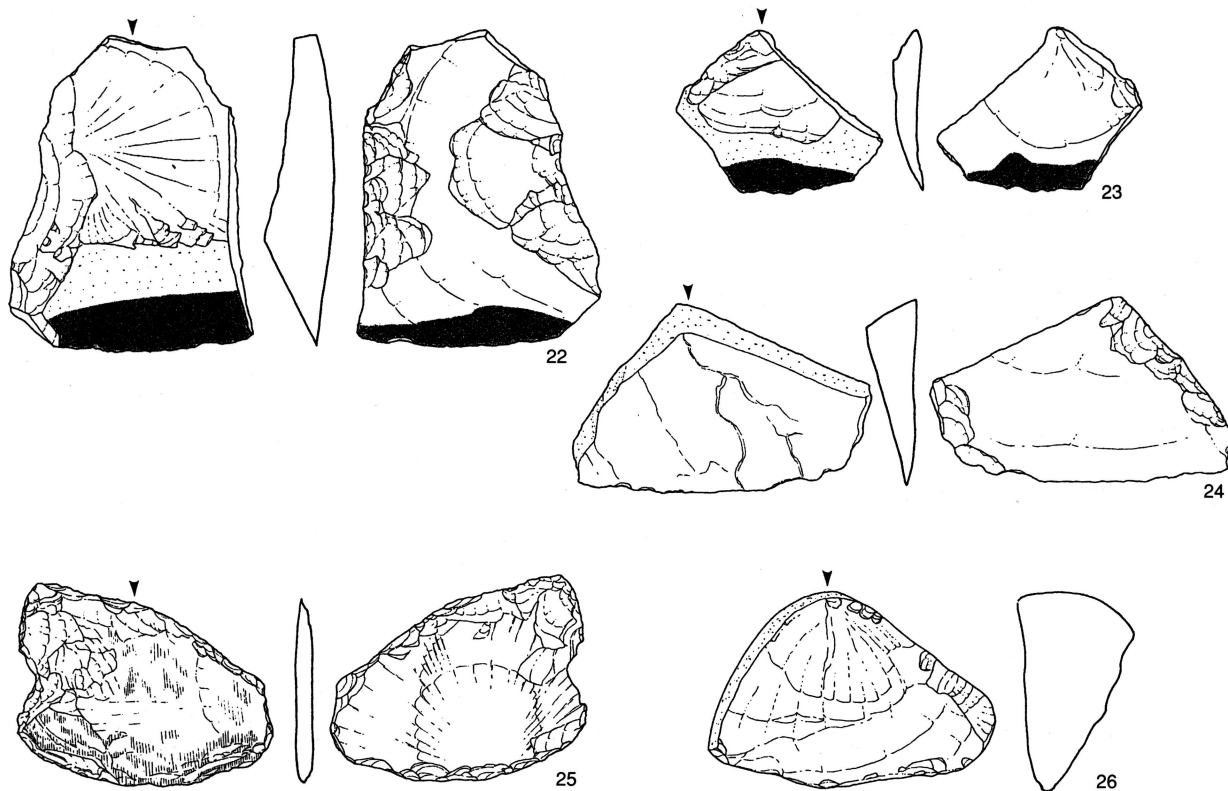
第3図 刃部の状態模式図



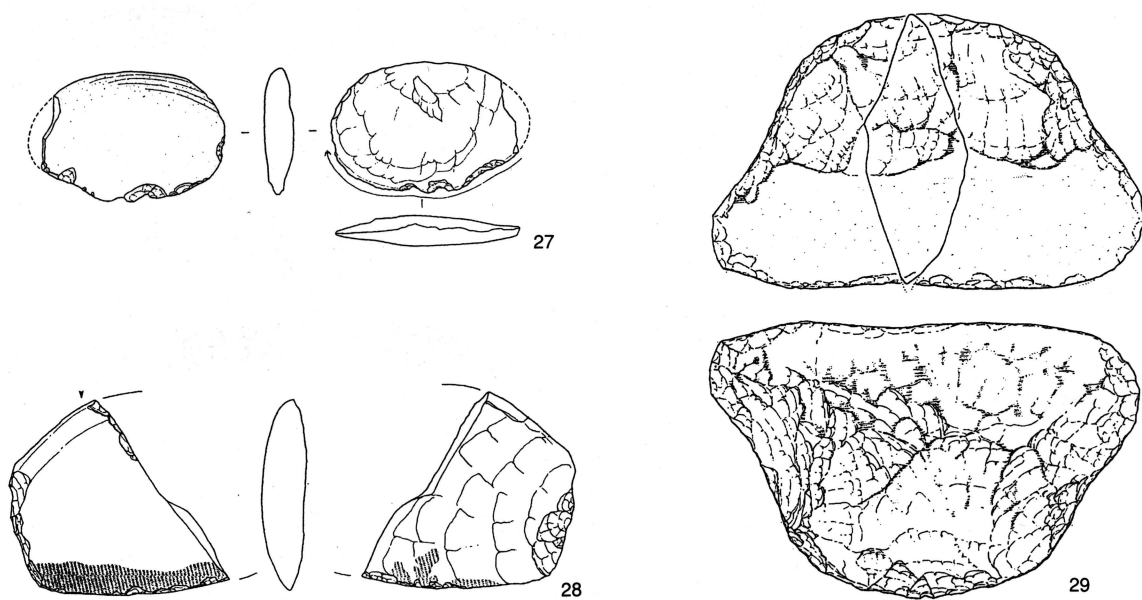
第4図 粗製剥片石器実測図(1) (1:3)



第5図 粗製剥片石器実測図(2) (1:3)



第6图 粗製剥片石器实测图(3) (1:3)



第7图 粗製剥片石器实测图(4) (1:3)